

「ホルモン」といえば、カンテキに焼き網で煙モウモウ、焼肉店のそれを思い浮かべて、「生野区ちゃうの」という声があがってきそうだが、さにあらず。大正区の「ホルモン」は牛のそれではなく、沖縄では汁に入れたり煮込んだりして食べる豚の内臓を鉄板で炒めてタレをからめた料理。この滋養あふれる独自の「街場の惣菜」は、地元アイテム「ホルモン」として定着した。昔から「平尾の子供で貧血はいてません」と

いうのはこれらのおかげだ。大正区の沖縄コミュニティが考案した「おきナニワフード」の横綱である。



三 軒家公園の「近代紡績工業発祥の地」の記念碑。
三 明治16年(1883)、大阪紡績会社の操業がここで始まり、大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれるほど発展を遂げた。太平洋戦争でほとんどが消失したが戦後は高度成長を追い風に工場の町として活気を取り戻す。昭和31年(1956)生まれで大正区の三軒家東小学校に通った大阪・難波の「アラビヤコーヒー」店主・高坂明郎さんは「工場から立ち上る煙は日本の発展を担う工場労働者の誇りで、小学校の文集タイトルは『けむりの子ら』でした。まだ「公害」という言葉もない時代ですね」と語る。

「けむりの子ら」の歴史。

大正10の扉



とびら
大阪市大正区

大正10の扉MAP

面積:9.43平方キロメートル
人口:67,705人
(いずれも平成25年1月1日現在)



発行:大阪市大正区
制作:クエストルーム 都市文化研究所 大阪市コミュニティ協会
デザイン:能勢将人 イラスト:コマツサトミ



空気感まるごと大正区文学。

『きょうのできごと』『その街の今は』『わたしがいなかった街で』と次々に話題作を発表する作家の柴崎友香さんは大正区の出身だ。彼女の小・中・高校時代の記憶をベースにした短編小説集『ビリジアン』(毎日新聞社)は物語の多くが三軒家、泉尾から半径1km以内の範囲で展開する。海拔ほぼ0メートル。潮の香りにアスファルトやコンクリート、鉄の匂いが混じり、湿気までが伝わってくる。ホルモンを焼く軽トラックがやって来る夕暮れ、商店街の棒アイス、自転車で川を越える期待感など、全身で大正の地を感じられるような短編集だ。

「船で逃げるな」地震と津波。

安政元年(1854)11月5日に大地震が起こった。M8.4の「安政南海地震」である。前日4日に発生した「安政東海地震」で水の上なら安心だと小舟に乗って避難している人もいたところへ、さらに大きな地震が起き、津波が襲った。「近來年代記」に記される「是故地震の用意二船二乗りし人々者、上ル間もなく大船の下敷きに成、…」といった悲劇だ。翌年7月に建立された大正橋のたもとの「安政大津波の碑」には、地震が発生したら津波が起こることを十分心得ておき、「船での避難は絶対してはならぬ」などと書かれている。



船で移動 できるんです。



尻無川と木津川そして大阪湾に囲まれていて、「大正内港」を真ん中に抱く。海と川、運河がおりなす「水の都」のもう一つの姿がここにあるが、その名残の「渡し船」も健在だ。明治40年(1907)、市営事業として29カ所あった「渡船場」は現在8つ。うち7つが大正区を結ぶ。渡船料は無料で、通勤通学客に自転車も運ぶ。自転車は船の進行方向に向けて並べる。最近では船で大正区へ、も人気だ。クルーズ船「御舟かもめ」の中野弘日さんは「天満橋の八軒家浜から尻無川左岸の棧橋まで30~40分あれば着きますよ。水上カフェやバーも並んでいます」と語る。

大量生産方式のT型フォードが発売された11年後の大正8年(1919)、「誰もが自動車を運転する時代が来る」と、20代の松本由太郎氏と友人の筒井氏の二人が「松筒自動車教習所」を三軒家に開設。昭和2年(1927)にはゼネラルモーターズが鶴町1丁目に日本法人を設立し工場を稼働。シボレーなどが日米開戦(1941)直前まで生産された。羽田に先駆けること2年前、昭和4年(1929)に日本初の本格的な民間飛行場である大阪(木津川)飛行場が船町で供用を開始。名古屋や福岡、高松、白浜を結ぶ定期旅客便で昭和13年(1938)には旅客数10,124人と国内有数の利用客を誇った。

クルマも 飛行機も ハヤい。



連続テレビ小説「純と愛」のロケで有名になった平尾本通商店街や千歳の渡船だが、四半世紀前には世界的俳優たちが大正区で銃撃戦をしていた。船町にある中山製鋼所が、指名手配犯の佐藤(松田優作)の隠れ場所として登場するリドリー・スコット監督の「ブラック・レイン」(1989年アメリカ)である。佐藤を追うNY市警の刑事ニックにマイケル・ダグラス、ニックの監視役で大阪府警の警部補・

松本に高倉健。バイクで逃げる佐藤に銃を向けるニックの前に、自転車の工具たちやダンブが邪魔になり…というシーンが記憶に残る。



ロケ地の 大先輩。



大正区民(約68,000人)の約1/4を占める沖縄出身者。移住の歴史はおおよそ100年と言われる。大きな転換期となったのは昭和47年(1972)

の本土復帰だ。3年後の昭和50年(1975)には「第1回沖縄青年の祭り」が開かれ、エイサーが人々の前で踊られた。千島にある大阪沖縄会館では民芸品店や琉舞民謡の会が入り、小林にある関西沖縄文庫では沖縄関係の図書を約8,000冊所蔵。フィールドワーク、三線教室などが開かれる。平尾、小林、北恩加島にも琉球舞踊教室や沖縄民謡研究所、琉球空手道場があり、他区民の利用も増えている。

沖縄、 知る・学ぶ・習う。

「川にクレーン」。 珍しい風景



現役で働くクレーンがこんなに数多く川沿いで見かける風景は、実は日本のどこにもない。コンテナを吊るガントリークレーンは色々な港で目にするが、大正の川沿いのクレーンは少し小ぶりでも形も様々。コンテナに積めない鋼材、砂、古紙、鉄くずなどの材料や、対岸の港区ではなんと新幹線も吊り上げる。大阪の旧港湾部には約150機のクレーンが存在するが、うち尻無川、木津川、大正内港やその周辺にその3/4が密集。クルーズ船で海から川を上っていくと、クレーンが頭を上下させてお出迎えしてくれているようで、何とも楽しげである。

「亥開(いびらき)」と名が付いたこの土地に明治41年(1908)、ベスト患者隔離所が新設されたが、大正3年(1914)に始まった第一次世界大戦ではこの施設が「大阪俘虜(ふりょ)収容所」として使用され、中国にいたドイツ兵など760人を収容した。捕虜たちは朝夕2回の点呼を受ける以外の労働は特になく、娯楽として読書、音楽、スポーツなどを楽しんだという。その一人に青島(チンタオ)で洋菓子喫茶を経営するカール・ユーハイム(1886-1945)がいた。彼は解放されても帰国せず、バームクーヘンを日本に伝えた。捕虜たちの「日本観」が大正で変わったのかもしれない。



捕虜と バームクーヘン。